

ち ば け じゅうたくしゅおく
千葉家住宅主屋

- ◆登録年月日 平成 15 年 3 月 18 日
- ◆所在地 江刺稲瀬字伊加里
- ◆所有者 個人

明治 25 年(1892)の建築で、当時の建築の特徴をよく表しています。東方下手を入母屋造とする屋根形状に特徴があります。昭和年代は酒屋を営業していました。



1 棟

桁行 9 間半、梁間 5 間半規模、四間取の平入、屋敷地に東西棟で建つ、もと茅葺、西方上手を寄棟造、木造 2 階建、鉄板葺、建築面積 228 ㎡

きゅういどかんそくじょほんかん

おうしゅううちゅうゆうがくかん

旧緯度観測所本館（奥州宇宙遊学館）

- ◆登録年月日 平成 29 年 10 月 27 日
- ◆所在地 水沢星ガ丘町
- ◆所有者 奥州市

竣工は大正10年（1921）。明治33年（1900）に建てられた現在の旧臨時緯度観測所本館（木村榮記念館）にかわり、国際緯度観測事業の中心的な役割を果たした建物です。明治・大正期にわたる二代の観測所が同敷地内にともに現存する点も、水沢観測所の国際的評価と発展を物語ります。こうした歴史的価値に加え、塔屋を有した優れた外観意匠から水沢のシンボルとしての意匠的価値も特筆されます。現在は、敷地内に移設・耐震化工事を経て、生涯学習施設「奥州宇宙遊学館」として活用されています。



1 棟

桁行 17 間、梁間 7 間規模、寄棟造棧瓦葺き、小屋組みはキングポストトラス、木造 2 階建て塔屋付き

きゅうりんじ い ど かんそくじょほんかん

きむらひさしきねんかん

旧臨時緯度観測所本館（木村榮記念館）

- ◆登録年月日 平成 29 年 10 月 27 日
- ◆所在地 水沢星ガ丘町
- ◆所有者 大学共同利用法人自然科学研究機構

竣工は明治33年（1900）。本建物の歴史的価値は、我が国最初期の国際観測事業の一環で建設されたことに求められます。万国測地学協会のベルリン総会において、極運動による緯度変化を研究する国際緯度観測事業が決議され、世界 6 局の緯度観測所の 1 局を担う臨時緯度観測所本館として



建てられたもので、我が国の近代科学が欧米諸国と対等と認められたという記念碑的性格を持ちます。本建物は、初代所長である木村榮の業績を紹介する「木村榮記念館」として活用されています。

1 棟

桁行 12 間、梁間 4 間規模、寄棟造棧瓦葺き、小屋組みはキングポストトラス、木造平屋建て

きゅうりんじ い ど かんそくじょがん し てんちようぎ し つ

旧臨時緯度観測所眼視天頂儀室

- ◆登録年月日 平成 29 年 10 月 27 日
- ◆所在地 水沢星ガ丘町
- ◆所有者 大学共同利用法人自然科学
研究機構

明治 32 年 (1899) 12 月 20 日に竣工した観測施設です。眼視天頂儀 1 号機 (ドイツワンシャフ社製) を用いた緯度観測が、この眼視天頂儀室で行われました。観測開始から 3 年後の明治 35 年 (1902)、木村榮所長はこれまで二つの項で説明されていた緯度変化が、第三の項を加えることにより観測結果を初めてうまく説明できることを発見

します。この項は Z 項と名付けられ、国際的に高い評価を得ました。本施設は日本の近代科学黎明期、国際的な研究成果を生んだ観測室であり、観測の終了後も、その歴史的重要性から敷地内に保存されています。



1 棟

約 4m 四方、切妻造り鉄板葺き、鉄骨造、平屋建て、屋根部分がレール上を東西に移動する開閉式
鉄板の壁には校正用の目標台に向かって窓が開けられ、中央に天頂儀を設置する堅牢な石積みの基壇が設けられる

きゅうりんじ い ど かんそくじょがん し てんちょうぎ し つ もくひょうだい およ おおいや

旧臨時緯度観測所眼視天頂儀室目標台及び覆屋

- ◆登録年月日 平成 29 年 10 月 27 日
- ◆所在地 水沢星ガ丘町
- ◆所有者 大学共同利用法人自然科学研究機構

眼視天頂儀室から北に約 100m離れて、観測時に北方向を校正するための点燈装置を設置した、レンガ積み自己的目标があります。天頂儀室と同様、観測装置を設置するにあたり、振動を抑える堅牢さを求めた設計です。覆屋は天頂儀室側の壁面南面に窓が開けられています。本施設は日本の近代科学黎明期、国際的な研究成果を生んだ観測施設であり、観測の終了後も、その歴史的重要性から敷地内に保存されています。



覆屋



目標台

1 棟

目標台はレンガ積みで点燈装置を設置する、覆屋は一間四方、切妻造り鉄板葺き（元茅葺）、木造平屋建て

ごとうはくきねんこうみんかん

後藤伯記念公民館

- ◆登録年月日 令和元年 12 月 5 日
- ◆所在地 水沢大手町
- ◆所有者 奥州市

読売新聞社再建の際の資金調達で、後藤新平に恩義を受けた正力松太郎が、昭和 16 年（1941）の後藤の十三回忌にあたり、遺徳顕彰事業として建築した近代洋風建築です。後藤新平がボーイスカウトに尽力した関係で、青少年育成のための武道場や集会場、和室などが複合した先駆的な教育文化施設として、後藤の出身地である水沢町（当時）に寄贈されました。

社会教育法の施行前ではありますが、日本で初めて「公民館」の名を冠した建物とされています。



1 棟（本館、日本館、柔剣道場から構成される）

棧瓦葺き、小屋組み（本館：平行弦トラス、柔剣道場：キングポストトラス）、木造 2 階建て
本館正面の大きな切妻屋根の妻壁をハーフティンバー風に飾り、前面に車寄せを突き出す

さいとうしやくみずさわ ぶん こと しょ こ
齋藤子爵水沢文庫図書館

- ◆登録年月日 令和 3 年 10 月 14 日
- ◆所在地 水沢字吉小路
- ◆所有者 奥州市

第 30 代内閣総理大臣を務めた齋藤實が、生家跡の敷地を買い戻して昭和 7 年（1932）に建てた図書館です。その目的は、東京にあった蔵書を郷土の子弟に閲覧させるためでした。海軍大臣を務めた齋藤の経歴を象徴するように、急勾配の梯子（階段）や 2 階床面に作られた海水を防ぐ覆蓋など、軍艦を模した造りが随所に見られます。昭和 11 年（1936）



に発生した二・二六事件で、齋藤が暗殺されたことや地元側の遠慮から、実際には市民に利用されることはありませんでしたが、公共建築の要素をもつ点は、齋藤の郷土に対する思想を具現化したものとして貴重です。

1 棟

間口 4 間半、奥行 5 間半、屋根はフラットルーフ、鉄骨鉄筋コンクリート造 2 階建て、昭和 10 年（1935）に木造 2 階建て塔屋付きの階段室を増設

さいとうしやくみずさわぶんことしよえつらんじょ
齋藤子爵水沢文庫図書閲覧所

- ◆登録年月日 令和 3 年 10 月 14 日
- ◆所在地 水沢字吉小路
- ◆所有者 奥州市

齋藤實が図書館の閲覧所として昭和 7 年(1932)に建てた建物で、帰郷の際に使えるように風呂・便所等をもつ住宅としても設計されています。齋藤は昭和 10 年(1935) 8 月に 20 日間程の滞在が最後となりましたが、昭和 20 年(1945)に疎開で春子夫人がここへ転居し、99 歳で亡くなるまでこの建物で暮らしています。前方に玄関・閲覧室を配し、中央部に座敷 3 部屋、中廊下をはさんで奥に住宅部となっており、齋藤家の居住空間と閲覧所が区別されています。こうした公共建築の要素をもつ点は、齋藤の郷土に対する思想を具現化したものとして貴重です。



1 棟

間口 17.62m、奥行き 13.223m、棧瓦葺妻入り（庇部分は銅板葺き）、玄関部分が入母屋造棧瓦葺妻入りに張り出す、木造平屋建て

き ゆ う あ べ け じゅうたく し ゆ お く

旧安倍家住宅主屋

- ◆登録年月日 令和 4 年 6 月 29 日
- ◆所在地 水沢字日高小路
- ◆所有者 奥州市

かつて武家住宅が並んでいた日高小路の角地に立地する、近代和風住宅です。2階戸袋に「翠松園」^{すいしょうえん}と刻んだ漆喰彫刻が見られ、前庭に江戸時代から残る 3 本の老松に由来する命名と推察されます。

上座敷を前庭に突出させた L 字型の構成や、社寺建築の意匠的特質を呈する外観、玄関の間の上部に設けられた二階座敷の^{すきやふう}数寄屋風意匠など、近世

武家住宅の建築構成とは異なる特徴を有しています。主屋の建築年代を直接に示す棟札や史料は発見されていませんが、襖絵の墨書年紀から明治 10 年（1877）にはおよそその建築が出来上がっていたと考えられ、早期の近代和風建築としての先駆的な価値を有しています。



1 棟

間口 15.323m、奥行 14.378m、木造平屋建て部分の屋根は入母屋造り、木造 2 階建て部分の屋根は寄棟造り

き ゆ う あ べ け じ ゆ う た く い た く ら

旧安倍家住宅板蔵

- ◆登録年月日 令和 4 年 6 月 29 日
- ◆所在地 水沢字日高小路
- ◆所有者 奥州市

旧安倍家住宅の表門に隣接して立つ板倉で、入り口を敷地内（南側）に向けています。敷地内で最も風化の進んだ建物であり、主屋と類似する明治 10 年（1877）頃の建築と推察されます。



1 棟

梁間 2 間、桁行 3 間、切妻造りトタン葺き

きゅうあべけじゅうたくどぞう

旧安倍家住宅土蔵

- ◆登録年月日 令和 4 年 6 月 29 日
- ◆所在地 水沢字日高小路
- ◆所有者 奥州市

旧安倍家住宅敷地の南東側に立地する、2階建ての土蔵です。
外観の腰部分は海鼠壁で隅切り上げ、正面北側の破風には置き
なまこかべ
上げによる漆喰の絵様彫刻を刻んでいます。主屋とは異なる柱
間寸法を持つことや、外壁側面の中央付近に、石造の蓋をスライ
ドさせる形式の床下換気があることなどから、建築年代は主屋
よりも新しく、明治中期ないし後期と考えられます。

1 棟

梁間4間、桁行5間、切妻造り妻入り、2階建て土蔵



き ゆ う あ べ け じゅうたくおもてもん

旧安倍家住宅表門

- ◆登録年月日 令和 4 年 6 月 29 日
- ◆所在地 水沢字日高小路
- ◆所有者 奥州市

旧安倍家住宅の敷地北側に設けられた表門で、敷地と日高小路の境界は水路となっています。本柱上部の冠木の上から大きく軒の出をだして、漆喰塗込とした珍しい形式をもちます。扉框の一部に古い材を残すものの、本柱などの主要な木部に風化がほとんどみられず、昭和初期の新しい時代の部材と推察されることから、本敷地のなかでは比較的新しい門と考えられます。



1 棟

寄棟造り棒トタン葺き（旧材は未詳）

きゅうあべけじゅうたくにわもん

旧安倍家住宅庭門

- ◆登録年月日 令和 4 年 6 月 29 日
- ◆所在地 水沢字日高小路
- ◆所有者 奥州市

旧安倍家住宅の表門から主屋玄関までのアプローチは、庭門と板塀によって前庭と区画されています。江戸時代、屋敷の主人より格上の来訪者は、庭門をくぐり、前庭を経由して主座敷に着座してから主人と対面したといい、建築構成としては近世武家住宅の名残を残すものです。しかし、材の風化はさほどなく、主屋玄関回りの増改築と同様の、大正から昭和初期の門と推察されます。



1 棟

柱芯々 3 尺 3 寸 5 分、腕木門、上部に透かし彫りの欄間彫刻を入れる

きゅうたかのけじゅうたくこきあん

旧高野家住宅古稀庵

- ◆登録年月日 令和 6 年 8 月 15 日
- ◆所在地 水沢字大畑小路
- ◆所有者 奥州市

旧高野家住宅は、国史跡である主屋（高野長英旧宅）、古稀庵、新座敷、板倉および瑞皐文庫の 5 棟からなる建造物群です。古稀庵は、高野家 13 代・長運（ちやううん）の古稀を祝って 14 代・長経（ちやうけい）が昭和 6 年に建築した離れ座敷で、銘木を多用し、床や床脇の構成も自由自在な装飾が組み合わされています。高野長運は、幕政批判の咎を受け罪人とされたままであった長英の復権運動に尽力し、明治 31 年（1898）の正四位追贈による名誉回復に大きく貢献した人物です。近代和風建築が成熟した昭和初期の時代性がうかがえる優れた意匠的価値に加えて、その建築背景に地域や家の歴史を物語る歴史的価値もあわせもつ貴重な建築です。



1 棟

間口 10.539m、奥行き 13.181m、入母屋造棧瓦葺き妻入り 玄関・小座敷が入母屋造棧瓦葺きで張り出す 木造平屋建て

きゅうたかのけじゅうたくしんざしき

旧高野家住宅新座敷

- ◆登録年月日 令和 6 年 8 月 15 日
- ◆所在地 水沢字大畑小路
- ◆所有者 奥州市

新座敷は、主屋（高野長英旧宅）と離れ座敷の古稀庵をつなぐように建てられた座敷棟で、渡り廊下で古稀庵に接続します。南側に片廊下を設けて、北側には東西方向に 9 畳半と 8 畳の続き座敷を配

し、その西側には風呂と便所が設けられています。東の座敷は、北辺の造り付けの棚上に窓を開け、繊細な組子のガラス障子を建て込んでおり、四周を塗り込めた折上天井など独的な意匠で、幾何学的な内装は文人趣味を彷彿とさせます。棟札は確認されていませんが、過去の聞き取り資料により、昭和 16 年（1941）頃に建築されたと考えられます。



1 棟

間口 14.570m、奥行き 7.367m、切妻造棧瓦葺き（庇は銅板葺き） 木造平屋建て

きゅうたかのけじゅうたくいたくら

旧高野家住宅板倉

- ◆登録年月日 令和 6 年 8 月 15 日
- ◆所在地 水沢字大畑小路
- ◆所有者 奥州市

水沢伊達氏が居住した要害の周囲には、武家屋敷が連なる小城下町が形成されていました。明治時代に建築された近代和風建築も、その多くが武家屋敷の屋敷構えを受け継いでおり、その基本構成は、門、主屋、板倉であったと考えられます。旧

高野家住宅もそうした建築の一つであり、板倉は、近世の武家屋敷の屋敷構えを継承する要素として位置付けられます。敷地の北東隅、古稀庵の背面に位置する小規模な板倉で、側柱に板を落込み、外部に半柱を立てて柱を密に見せています。部材の経年感と仕様により、明治時代後期の建築と推定されます。



1 棟

間口 3.840m、奥行き 5.760m、切妻造妻入鉄板葺き

きゅうたかのけじゅうたくずいこうぶんこ

旧高野家住宅瑞臯文庫

- ◆登録年月日 令和 6 年 8 月 15 日
- ◆所在地 水沢字大畑小路
- ◆所有者 奥州市

ずいこうぶんこ

瑞臯文庫は、敷地の北西隅に南面して建つ文庫蔵で、『高野長運年譜』から昭和 7 年（1932）の建築であることが判明しています。「瑞臯」は高野長英の雅号であり、長英の故郷である水沢を意味しています。外観はモルタル塗りの大壁造りで、正面に銅板張の

観音扉、両側面に鉄格子付きの小規模な開口部を設けています。内部には装飾錠を持つ金庫が設置され、高野長運・長経親子によって収集された長英ゆかりの歴史資料が保管されていました。現在、それらの資料群は高野長英記念館に移管され、そのうち 58 点は「高野長英関係資料」として重要文化財に指定されています。意匠的には簡素で小規模ながら、高野長運・長経親子の長英顕彰活動に密接に関りを持つ建物です。



1 棟

間口 2.272m、奥行 2.286m、土蔵造切妻造妻入棧瓦葺き